

## 定年退職を迎えて

共通機器部門

渡辺文雄

1976年に工学部電気第2講座へ技官として採用され、翌年に第2類回路システム工学専攻電力研究室に改名、同時に情報工学専攻、電子物性工学専攻(後の先端研)、係数管理工学専攻(後に回路システムと統合してシステムサイバネティクスに)が発足。研究室は学生も含めて全員自分より年上で、研究テーマの一つであるアクティブフィルタによる高調波除去実験のため、最初の指示は当時最新のOPアンプFC741のピンを覚えることでした。真空管とトランジスタしか知らなかったため、こんな簡単に電圧演算できるのかと驚きました。そのころはまだ真空管式のアナログコンピュータが現役で動いていました。

教官の一人から「きみ運がいいね、ここは勉強して給料がもらえるよ」と言われても、夏休みの宿題を夏休みにやったことがない自分は「はあ、そうですね」としか答えられず、「まずい所に来たかも」の予感も何のその、作った回路が動くのが面白く、よく院生と徹夜でハンダ付けしていました。これはやがて論理ICからマイコンの出現によりデジタルフィルタへと変わってゆきます。そのころ西条に移転してきますが、その経緯と苦労は先輩方の記述のとおりで、午後6時に全部のお店が閉まるとかカルチャーショックでした。

工学部が移転した早い段階で風車と温水ユニットをA1棟屋上に学生と設置しました。特に風車の設置は今では考えられない危険な作業でしたが、完成した手作りソーラーシステムのコントロールに8ビットマイコン6809が使用され、組み込みプログラミングの面白さに目覚めます。やがて普通の研究室にもパソコンやUNIX機(一晩がかりでテープでOSをインストールするやつ)が導入され、自前で計算できるようになってからは研究テーマの主流が実測からシミュレーションへと変わってゆきます。それまでのFORTRANは1行1枚の紙のカードに穴をあけてプログラムしており、京大から10万枚のサブルーチンを借りるとかも体力勝負です。東千田にあった頃の計算センターの2階に置かれた高価なメインフレームの横で、真夜中に卓球やラジコンカーで遊んでいたのも今となっては良い思い出です。

それから時代は進み、定員削減の影響で別の研究室担当となりますが、その研究室は振動騒音解析手法を研究しており、数式を見ると気分が悪くなる自分に出る幕はありませんでした。学生実習を除けば研究室機材の保守と学会事務や教授の秘書兼雑用係の仕事ばかりしていた時代が長く続くこととなります。が、「でもこれはこれでいいかも、定時に帰れるし」と、段々ぬるま湯状態にハマってゆきます。

さらに時代はどんどん進み技術職員の組織化が行われ、技術長から中四国研修で何か発表しろと言われ、しかたなく当時TIが販促でばら撒いていたDSPを使ってFIRフィルタを作りましたが、発表の2日前まで動かず、卒修論発表会に向けてケツに火がついた学生の気持ちがよくわかるとともに、即製の発表資料にも当然ツツコミを受けることとなります。それからさらに時間が経って突然の独立法人化と技術センターの設立となり、それまで2類の人間しか知らない自分も他部門の技術職員と出会うこととなります、皆さんすごい技術の持ち主で恐縮しました。ちなみに学校工場は怖い人ばかりだと思っていました。

近年また縁あって最初の研究室とかかわることになり、再びマイコンや電子回路に触れるようになりましたが、ぬるま湯で錆びついた頭には昔なら夢のようなツールや新しい製品もなかなか使いこなせず、実際、電子情報系の分野は勘や経験がものをいうのではなく、次々出現する製品やツールを使いこなすほうが大事であり、むしろ若い人のほうがよく知っており、逆に尊重すべきと考えようになります。老兵は死なずというあれです。

さて思いつくまま書いてきましたが、当欄を飾る歴代の先輩方とは違い、優秀でもなく特別な技能も活躍も理想もなく、「なんとなく勤めました」みたいでちょっと申し訳ないなと思いながら、久しく座右の銘だった昔の漫画のセリフが今も頭に響きます「それでいいのだ」と。